名古屋のアーティストのキャリア構築に関するインタビュー調査

【インタビューデータ版（美術編）】

１　職業としてのアーティストになるまで

１）高校から美術大学へのルート選択

今回、インタビューした対象者のうち、アーティスト 14 人のうち 12 人が美術大学、残り 2 人は教育大学、総合大学の美術専攻の出身であった。高校の美術科やデザイン科の出身者は、高校進学時点で将来、美術に関わる進路に選ぶことを意識している。美術科の場合、教員をはじめ美術関係者と接する機会が多いことから、美術の概念や技術だけでなく、その時代の美術界の動向や美術大学での学科選択やなどの情報についても豊富に触れていること、なにより人生のロールモデルとなる「アーティスト」と出会っていることが語られた。

「高校が美術科で、中学の時点でなんか美術みたいな、ざっくりした選択をその時まずしていて。美術の世界の自由さみたいなものには、3 年間でだんだん憧れもできていて、現代美術というものがあるみたいな。世界には、美術というものはここよりも広く広がっているみたいな、そういうフィーリングを感じていく」（30 代男性）
「（名古屋市中区に）白土舎というギャラリーがありまして、『奈良美智さんが初めて展示したの、うちなんだよ』って。作家っていうか絵を絶対やりたかったんですけど、『歌手になりたい』みたいな非現実的なものと思ってたんですけど、地元で奈良さんの絵がってなったら、ちょっとでも希望はあるのかなって思った」（30 代女性）
「私の時は、油絵科に行けば何でもできるよって言われていて、そういう科に行く、イコールパフォーマンスだったりインスタレーションだったり空間表現だったりができるっていうので、油絵科に行くっていう形ですね」（40 代女性）

美術大学に行くためには、美術受験のための予備校に通う学生が大半だが、名古屋圏においては河合塾美術研究所が大手であり、地元や地元出身のアーティストが中心となって講師陣を務めている。その講師や塾生の人脈が、名古屋圏の美術業界における重要なネットワークともなっている。

「河合塾は（勉強の方に親に）無理やり入れさせられて、それが嫌で隣の美術研究所っていうのに移った。講師の先生たちもみんなそこで自分の作品の制作をしていたり」（50 代男性）
「河合塾にアーティストの先生がいたんですけど、やっぱ『絵とは』みたいなことを教えてくれて、だんだん憧れていったっていうのはあります」（30 代男性）

「河合塾の力って結構すごくって、全国の美大にこの界隈の子たちを送り込んでる。河合塾による作家のつながりとか、河合塾と作家のつながり、河合塾の先生たちと作家のつながりって、結構濃いんですよ。講師として戻ってくる子たちもいるしね、夏休みだけとか。美術大学で、ある科のコースは全部あるので、幅広いですよね」（50 代女性）

２）名古屋圏外への移動

名古屋圏の高校の美術科や河合塾などの美術予備校出身者からは、首都圏の大学に進む者が一定数いる。また、学部は名古屋圏の美術大学であるが、より幅広い体験ができる環境を求めて、大学院やレジデンスで首都圏や関西圏に移る者も多い。

「東京の美術大学だと『名古屋人多いね、今年も』みたいなのがあって。それと、地方の美術大学出て、本気でやりたかったら、東京の大学の大学院に行く。東京だと、東京藝大卒じゃないと美術予備校講師にもなれないとも聞きます。最終学歴っていうのが残るんだったら、大学院に行っとくべきっていう、っていうほうのやり方をする子、増えましたよね」（50 代女性）
「愛知にずっと住んでるんで、外に知り合いが欲しいっていうのが多分一番大きいのかな。あと、同世代の作品作ってる人の勢いというか、魅力的に映った同世代がやっぱ関東にはいる。名古屋にいると、それはそれですごく仲良くやっていけそうな雰囲気はあるんですけど、東京とかにはもうちょっとばちばちしたというか、やってやるぜみたいな人たちが集まっていて、そういうのが魅力的に映ったのが学部の頃。東京藝大の院に受かって行った先輩の話を聞いたりとかすると、やっぱそれが刺激になるというか」（30 代男性）
「関東地方のレジデンスに参加してまた名古屋に帰ってっていうことを 1 年ぐらい続けていました。普通に作品を作って発表するっていうだけで考えたら、名古屋のほうがやりやすかったと思います。名古屋は美大があって美術人口も多いですし、レベルは高いかもしれない。しかし、分野が絵画のみで狭い。（自分が行っていたレジデンスは）もうどんな人でも受け入れるよっていう建物で、ごちゃ混ぜ感のフラット感はあったので、何でもできる感じはありました」（40 代女性）

また、愛知県立芸術大学は全国区であり、首都圏出身の学生も一定数在籍し、卒業後首都圏に帰っていく。その人材の移動が、首都圏での愛知県芸大の存在感を拡大していく要因にもなったという。

「1980 年代っていうのは、愛知県芸大の油画専攻って東京のすいどーばた美術学院って予備校出身者が主体になってたんです。7 割ぐらいはそこから。今は河合塾だけど、当時はほんの少ししか入らなくて。洋画とか彫刻が大体すいどーばたで、卒業した後、関東に帰

って、向こうを拠点にして活動始めて。でも、この人たち変だよね、ペインティングで面白いよねってなって。関東でペインティングを探したら愛知県芸大、あれ愛知県芸大、こっちも愛知県芸大みたいな」（60 代男性）

３）アーティストとして生きる

卒業後に表現者としてのアーティストや美術関係の職業に就くきっかけは、大学でのアーティスト育成の環境に身をおいたこと、あるいは教員などの現役のアーティストとの出会い、アートプロジェクトなどのイベントの現場を経験したことなどが大きい。

「大学での現役作家との出会いは大きかったです。名古屋に戻ってきてからは、ギャラリーで個展をやり始めて、ほそぼそとほんとにアートをやってくんだと思ってやってきたんですけど」（60 代男性）
「名古屋の美大ではゲストで作家さんや評論家やギャラリーの方がちょくちょく講評会に来て、ほんとに距離が近かったりとか。ゲストの人が来ても、『ご飯食べよう』みたいな感じで。それで東京のコマーシャルギャラリーのあるところに、学部の 4 年生のころに所属することが決まりました」（30 代女性）
「作家志望は結構いますよ、私大にも。公立大学を落ちて、流れてくる子は、力がないわけではないので」（50 代女性）
「大学生のときに著名なアーティストのプロジェクトでコーディネーターの人に会ったんです。何て面白そうな仕事なんだろうと思って手伝ってるうちに、自分もなったっていうのがあるので、そういうボランティアした経験とかも大事」（40 代女性）

また、卒業時期が就職氷河期だったため、就職活動がうまくいかなかった結果、大学院に進んだ者もいる。
「地元の大学卒業して、全然就職できなかったんですよね。もっといろんなとこでいろんな経験をしてきなさいみたいな雰囲気はあったので、海外の美術大学の大学院に行き直して。その後は作品発表しながら教員をしてましたが、ワンダーサイト 1 年間っての受かったから、もうまるまる、全部辞めて行った」（40 代男性）

４）アーティスト以外のキャリア選択

一方、美術大学を卒業しても、美術の道を選択しない者、一度進んでもその後断念する者もいる。最近は、大学卒業時に就職を選ぶ学生が増加しているともいう。日本の経済環境の停滞により、学生の家庭の経済状況がシビアになっている傾向もある。

「（作家志望が多いのは）彫刻、油、日本画はそうでしょうね。最近、就活する学生が多

いんですけど、『もう絵はいいです』みたいな。1割、2割じゃないのかな」（60代男性）
「美術大学の就職率が、私立だと40％ぐらいとか。大学によっていろいろあるんですけれど、就職を目指して美術大学に入って就職していく人もいる」（60代女性）

アーティストとしての活動は、表現者として一定の評価を得られるかどうか、加えて生計が立てられるかどうかが継続の鍵となる。作品の売買や、アートプロジェクトの謝礼など、表現活動だけで生計を立てられるのは一握りのアーティストであり、大半が兼業をすることになる。教職など美術関係の職業に就いたとしても、やがて教育などの業務が繁忙になっていき、アーティスト活動をやめてしまうケースもよくあるという。

「美術大学まではまあ何とか行っても、その後続けられない環境にある。自分もたくさん教えてきましたけども、才能順に続けてるわけじゃないです」（70代男性）
「就職しないと家族も余裕がないから、就職して何かキャリアアップ、Webのちょっとテクニックを得て独立するとか、そういうビジョンをちゃんと持って就職しようとしてる子がいて。それはそれでいいんですけど、昔とはだいぶ状況が違う。そうすると仕事しながら30歳頃まで制作して芽が出るって相当大変な活動をしてかないといけないので、今いる若者が10年ぐらいかけてアーティストになってくキャリアプランみたいなのが、ちょっと不安。大学教員としては、自分たちの価値観で『もうちょっとふらふらしたら、いい作家になるのに』みたいなことは絶対言わないっていうか、就職するって決めてたらそれを応援しなきゃいけない」（40代女性）
「教職に就いて、教育のほうへ行っちゃって、やっぱり忙しいのか、興味がなくなるのかで、あまりやってないっていう方も多いのかもしれないです」（50代女性）

２　キャリア構築の戦略

１）アーティストとしての活動範囲

ギャラリーでの展示、美術展などでの展覧会　アートプロジェクト、レジデンスなど

今回のインタビュー対象者は自他ともにアーティストとして認められ活動を行っている。表現活動はギャラリーでの展示、美術展などでの展覧会　アートプロジェクト、レジデンス、ワークショップなどであり、それも自主企画か、依頼企画か、公募か、いずれかでも活動の在り方は異なり、また企業などからのクライアントワークを受ける場合もある。制作拠点は名古屋圏であっても、首都圏や関西圏はじめ全国、海外にも活動拠点や連携先があることが語られた

「海外と、関西と名古屋に取り扱いギャラリーが１軒ずつ。東京でもあったんですけども、昨年クローズしちゃったから今ちょっと保留です」（40 代男性）

「東京のギャラリーに所属していて、百貨店の美術画廊やギャラリーなどで個展をしています。最近、企業の創立記念のイベントに初めて参加しまして、その他新聞の挿絵など、ちょっとずついろんな分野のお仕事を」(30 代女性)
「ギャラリーに所属していないので、美術館で直接やったりとか、その絡みでワークショップをやったり、芸術祭とか」(40 代男性)
「名古屋にずっと制作拠点を持っていて、名古屋や全国で展覧会とかで作品を出品したり、それを販売したり。ギャラリーは、今フリーです」(30 代男性)
「以前は個人で、映像とパフォーマンスを使ったインスタレーションをしていました。今は友人同士で好きな場所を見つけて、そこが面白いから展示をするみたいな形で、自主企画的にやっています」(40 代女性)
「最近では愛知や岐阜の公立美術館、ギャラリーなど。この歳になってどうかと思ったけどコンペに出して、公立美術館で展示をしたりしました」(60 代男性)
「国内で 3 カ月アトリエがもらえて、住む場所と制作費と生活費も全部出してもらえた上に美術館で個展ができるっていうレジデンスにもいきました」(30 代女性)

既存の展示スペースではなく、自身でスペース運営しているケースや、ユニークベニューでの企画、あるいは NFT アートなど新しい形態の作品発表に取り組む作家も多い。

「最初は名古屋で画廊を借りるとこからスタートしたんですよね。いまは発表の場は海外のほうが多くて。オルタナティブスペースみたいなところだったり、自分自身も運営してたので、そこでやったり」(50 代女性)
「発表の場は、ギャラリー、美術館、それから多目的スペースというか場所を利用して企画するっていうことですかね。基本的にはお声掛けいただいて、参加することが多いです。自分で企画したのは 2 回ぐらいですかね」(60 代女性)
「学生のころから、自分でアーティスト・ラン・スペースを作って、それ自身が全国的に話題になってというそういうプロデュース活動をしているアーティストたちもいる」(60 代男性)
「VR の中にもアトリエがあって、リアルと VR スタジオを行きしながら、デジタルのほうでも絵を描き、リアルでも絵を描き、それを NFT とかで絵を販売したりしてます」(30 代男性)

２）アーティストとしてのキャリアパス

アーティストとして美術業界に出るきっかけは、美術大学であれば卒業制作展、大学院の修了制作展などで作品が評価されることがファーストステップの場合が多い。名古屋圏の美術大学の卒業制作展でも、首都圏や関西圏のギャラリー担当者や、美術館の学芸員な

どの関係者が、若手作家の発掘のために視察に来る。また、学部の在学中から若手の登竜門とされる公募展での入選を狙うのもスタンダードである。その他、大学の教員のつながりなどから、ギャラリー扱いが始まる場合もある。

「卒業制作展でいろんな人が見にきて、この子面白いなとかで、次の展示につながるとかって機会が大体多くて。そこから流れに乗ってばんばんやっていく人もいるけど、大体ビギナーズラックみたいなのが落ち着いていって、また大学院に入るんでまた修了制作っていうのがあって、そこでまた見てもらったところで、その流れで声掛けてもらう、大体そんな感じですね。」（30 代男性）
「10 年ぐらい前、ギャラリーの青田刈りがちょっとひどくなりすぎて。どこの美大もギャラリストが来て先生の言うことよりそっちの言うことばっかり聞いちゃうとか。最近はそのへんも落ち着いてっていうとこですかね」（60 代男性）
「東京の美大は、賞のスケジュールにあわせて、1～2 年生の時から損保ジャパンの FACE は何月、なんとかは何月で、みんなでそれ用に描いて。運送もリーダーみたいな子が集計取って、トラック手配して『みんなでこんだけかかったから割り勘ね』って、送ってっていうのがもう習慣化されて、『あ、これは意識違うな』って。この絵はこの賞取りやすいとか、『審査員この人だからって、こういう企画の絵』みたいなのもあったり」（30 代女性）
「名古屋の美術大学でも最近、そういう先生の紹介などがあって、東京とか京都の画廊の扱い作家になったような人は、わりとずっと売れてますね」（60 代男性）

美術館でのグループ展や、美術館以外でもキュレイターなどの専門家の選定があり、主催者側が経費を支出する企画展などへの出展は、作家としての業績になる。

「（美術館の展示でとりあげられるのはマイルストーンであり）そうでしょうね。自主企画じゃなくて予算がついてる企画で取り上げられるのは」（60 代男性）

日本画や工芸分野は従来からの団体展に属し、その組織の段階を踏んでキャリアアップしていくルートが存在しているが、洋画、とくに現代美術系の作品においては現在はほぼないという。

「美大の中でも、日展系の人と現代アート系の人は、それぞれ全然キャリアパスが違う」（60 代男性）
「（団体展について洋画は）70 年代で崩壊したんじゃないですかね。80 年代も割と団体の先生はいたんだけど、所属することはほとんど強要してない。新制作とか国画とかありますけど、昔はギャラリーを紹介してくれたりいろんな特典はあったんだけど、今もうほと

んど売れないし。80 年代か 90 年代ぐらいからもうそう。工芸や日本画とか、伝統的なところは今でもそういうところがあるでしょうけど」(60 代男性)

一方、2000 年前後から全国で国際芸術祭やアートプロジェクトが多数実施されるようになり、ギャラリーや美術館ではなく、まちなかや地域と連携した活動に特化したアーティストも出現している。

「今、芸術祭とかいろんな形で、20 年前とは違った形で、アートワールドが動いてるので。リレーショナルなアートとかの傾向ですけども。いわゆる芸術祭だったりとか、いろんなイベントっていうか、作品とワークショップとか、そういうのを混合的にしながら、規模を広げながらインターナショナルで展開していくっていうのはもちろんある」(40 代男性)
「国内で芸術祭が増えて、アートプロジェクトみたいな。まちづくりとかいろんな、普通の人と、市民とアートを実際どうつなぐかみたいな時に、自分はそういう問題とかをずっと考えてたので、ちょうどニーズと合ったっていうのもあるかもしれない」(40 代男性)
「ギャラリーに頼るっていうやり方をやめてしまって、海外をレジデンス等で転戦して、名を上げて帰ってくる。名が上がらなくっても、すごい底力を付けて帰ってくる。作家以外の関係者との接し方っていうのも学んで、修業してくる。そのようなタイプ、ある程度知力も高くて、コミュニケーション力も高いっていうタイプの作家は、その作戦でのし上がっていってる。ただ、同じタイプっていうのは、名古屋には少ない。そういう子たちは名古屋から出ちゃう」(50 代女性)

３）ネットワークを築く

アーティストとして表現活動を継続し、仕事の依頼を受けるには、ギャラリー、美術館、アートプロジェクトの関係者など、美術業界内での人脈を形成していくことが必要である。多くは自身の出身大学のつながり、また作品展示の場での出会いがあるが、最近では SNS や WEB での情報発信も大きい。

「まず学校の先生があって、卒業後はやっぱり同級生であったり、美大の美術仲間ですよね、その次にギャラリーの人に運が良ければ出会えてっていう感じで、その 3 点。一番大事なのが 2 番目の美術仲間だと思うんですけれども、それが継続させてくれる一番の原動力かなと思います。いい先生と出会うか出会わないかでも大きく差があって、2 番目に大事なのが友達が作れるか作れないかで、3 番目がギャラリーとか制作する側じゃないマネジメントというかサポートしてくれる人がいるか」(50 代男性)

「同世代の美術大学出身者たちは、出身大学の関係で仕事に就いてるけど、自分の大学は作家活動してる人はほとんどいないので、自分は全然、そういうサポートがない」(40 代男性)
「作家同士で『この人いいよ』みたいな、直接の声で、ギャラリーの方とかが『この人が直接いいって言うならばいいのかな』って思えたりとかもすると思うんですけど」(30 代女性)
「ギャラリーのオープニングで、所属作家で名古屋の主だったアーティストがいて、先生が学生の自分を紹介してくれてそれで注目が集まる。名古屋市美術館の国際展に呼ばれたのは、名古屋のギャラリーで結構力入れて展覧会やって、見に来た学芸員が気に入ってくれたみたい」(60 代男性)
「(大学の先生からギャラリーを紹介してもらうなどは) 東京の美大とかだと結構ありますからね。愛知はまあ、ないわけじゃないけど、ほんとに評論家来たらちょっと見てもらうとか、そういう感じかな。懇意にしてるギャラリーでグループ展やるとか、その程度で。今もっと個人主義っていうかな、何か点と点で、みんな点でつながってて」(60 代男性)
「最近は結構やっぱり SNS とかからのお仕事があります。ネット上で自分のことを知って、所属ギャラリーっていうものがちゃんとしたところで『ここに所属してるなら、将来の見込みあるね』って」(30 代女性)

４）海外の経験

アーティストのキャリアにとっては、技術や表現の向上、知見を広め、経験値を積み人脈を拡げるという点でも海外での経験は大きなマイルストーンである。海外での活動には、留学、海外派遣、レジデンス、アートフェスティバルへの参加、美術館やギャラリーの展覧会への参加などがある。名古屋圏の大学を出て、首都圏に出るのではなく海外経験を積んで全国区で活動しているアーティストも多く存在する。

「名古屋の作家は、東京で大きくなっていくというよりは、海外でいろんな活動をされて、発表をされて、有名になっていく方が多いっていうふうなのは聞きますが。きっと（ドイツに滞在した）奈良美智さんの影響があってだとは思うんですけれど」(60 代女性)
「自分、留学はできなかったんでアメリカに応募して行ったんですね。アーティスト・イン・レジデンスで、それが一番大きなきっかけになったかなと思う」(50 代男性)
「ヨーロッパの大学院出て、そのあとすぐ中東の国際展に呼んでもらって出品したりとかして。だから気持ちだけでかくなって帰って来た」(40 代男性)

「助成制度でドイツにレジデンスに行かせてもらったのが自分にとって大きかったです。作家としての経験として、例えばギャラリーとかと付き合うことになったし、外で活躍できるきっかけになったのはそのレジデンスのおかげなんです。作家としての自分の活動をその後 10 年、20 年支えてくれた。自分にとって大事なきっかけになったと思います」（40 代男性）
「名古屋市文化振興事業団ですか。助成を頂いてアメリカに行ったこと、とても大きかったです。それはもう全然違うと思う。その後も名古屋市美術館の国際展を見た、アメリカ大使館の担当者からアメリカに呼びたいと。アーティスト・イン・レジデンスと旅行をしなさいと」（60 代男性）

５）公的プロジェクト・公立美術館での展示、公的支援・助成のキャリアへの貢献

美術界でアーティストとして評価されていくためには、公募展で入賞する、アワードや助成を獲得する、美術館のグループ展やアートプロジェクトに招聘される、アーティスト・イン・レジデンスに参加することなどが条件として挙げられる。全国規模では「アートアワードトーキョー 丸の内」「VOCA 賞」、名古屋および名古屋近郊では、あいちトリエンナーレやその関連公募展である「アーツチャレンジ」、名古屋市美術館の「現代美術のポジション」展、愛銀教育文化財団、近隣の自治体や公立美術館での助成や公募展などが事例としてあげられた。

「ポジション展でやっぱりみんなに認知されたっていうのはあります。それまでギャラリーで個展とかしてましたけど、美術館でやるってなるともっと幅が、見る人が広がるというか。自分でも、美術館に出展するんでやっぱ力作を出したいっていう欲望が生まれるじゃないですか。そういう時に自分の中でも重要なポイントになる作品が生まれたりとか。略歴に載せる時に絶対載せますもんね、ポジション」（30 代男性）
「そのあとずっと仕事が止まらなくなったのはやっぱあいちトリエンナーレ。その前の 1 年間トーキョーワンダーサイトのレジデンスに行ってて。国内において大きかったかなと思ってます。そこから 10 年間ぐらいはノンストップでした」（40 代男性）
「名古屋ではわりと頑張って、アーツチャレンジや、愛銀教育文化財団の助成金ももらったり。名古屋市民ギャラリー矢田や、アートラボあいち、名古屋大学のギャラリーとか。豊田市のまちなか展示も参加しました」（40 代女性）
「瀬戸市は、アーティストに助成金が出るんですよね。（瀬戸市外でも）展覧会する時に通れば上限 30 万円。3 回ぐらい今まで受けてて、だいぶ助かるんですよ」（30 代男性）
「岐阜県美術館の公募展に通って、それの制作援助金みたいなので 50 万円もらえました」（30 代男性）

海外渡航に関する助成は、アーティストにとってかなり大きく意識されている。助成ではポーラ美術振興財団の「若手芸術家の在外研修助成」、文化庁の「新進芸術家の海外研修」、かつての名古屋市文化振興事業団の海外派遣制度などもあげられた。

「海外に行きたい人が最終的に狙うのは文化庁で、みんな何を気を付けて狙うかって、年齢制限です。文化庁は最後の最後。49 歳だから。30 歳でそれ使っちゃうと。ポーラが 35 歳とか、あるんですよ。だから要領いいやつは、対象が若いやつから取っていくっていう。（履歴書にも書けるキャリアでしょうか）それもないわけじゃないと思う。『あ、ポーラ取ったやつね』みたいな。僕らもそうやって見ます」（60 代男性）
「1990 年代に名古屋市文化振興事業団の助成金をいただいて海外に 4 カ月行って、当時の名古屋市美術館の学芸課長にこんなのがあるよ、推薦書書くよって教えていただいて。それがなかったら行く予定はなかったです。その後、愛知県の助成を頂いて 2 年行っています。そのあとはポーラ美術振興財団とアサヒグループ芸術文化財団、野村財団。日本人が海外で発表する場合の助成ってやつがほとんどですね。あとは国際交流基金」（50 代女性）

一方、既存の助成については、芸術活動そのものに対する助成がなく、またプロジェクト型の助成がアーティストの自主活動に委ねられすぎているというような問題意識も聞かれた。

「足りないのは個人に出すやつ。このお金で好きな絵描いてっていうような、そういうのはあんまりない。グループで企画して、ちょっとパブリックアウトで面白いことしたいとか、そういうのが最近多いんですよ」（60 代男性）
「ARToC10 は本当に応募してほしい人がしておらず、原因はもうみんなよく分かっていて、コーディネーターとかもいないのに、自分たちで場所を見つけて、交渉してやれっていうやり方なんですよね、拠点もないし。300 万円のプロジェクトを動かせる人材っていうのが限られていた。結局、その規模のものに慣れている人たちが通っていってしまうから、ほぼ舞台系でした。トライアル部門っていう最大 50 万っていう枠を作って、若いアーティストが来ないかなって期待してたんですけど、来ない。中川運河っていう縛りも大きくて。コーディネーターを入れようっていう話が出てきたのが終わりのほうで、もう間に合わなかった」（50 代女性）

しかし、賞や展覧会への出展で一時注目を浴びても、次のチャンスがすぐ来るわけでもなく、生計はすぐには成り立たない。それをきっかけにしてプロモーションし続ける必要があり、また効果がでるのは数年後であるという。また、名古屋市芸術賞など自治体の顕

彰的な賞についてはアーティストのキャリアアップにはあまりインパクトがない、という声も聞かれた。

「美術館に出展した作品が話題になって、まだ若かったから、これを機に自分の世界が一変すると思ってたんですけど、そうはいかなくて、『あれ、まだバイトしなきゃ駄目だな』とか。展覧会の依頼とかはいっぱいあるんですけど、それをルーティンみたいになっててこなしていく。作品はたまに売れるけどそんな自分の日常は変わらないし、一時期そういうのにすごく絶望した時期があった」（30 代男性）
「1 個の賞を取っても生活が助かるのは数カ月なんですよ。その賞を取ったからといって、仕事がわって来るわけではなくって。1 個の賞の効果があるのは 3 年後ぐらいっていうのを分かるまでに『頑張って賞を取ったけど、意味なかったのかな』とか。大学院卒業して、ずっとバイトしながら制作していて、自分の中では順調に来ていたけど、やっぱり生活ってなると難しくって」（30 代女性）
「自治体の芸術賞もある種の自分自身が対外的に評価される一行になるっていうのはあるんだと思うので、ありがたいなとは思ってるんですけども、それをもらったから何か変わったことは 1 ミリもないです」（40 代男性）
「自治体の芸術賞をもらうと一般には 3 ミリぐらい信用度上がりますよ。でもアート仲間からは、そんなの略歴に書いてかっこ悪いみたいにいわれる。作品で海外の賞もらったり、レジデンスしたり向こうで発表したりするのはちょっと上がる感じはします。美術業界ではそれの価値を知ってるから」（60 代男性）

６）キャリアの停滞

アーティスト活動を継続していく中では、活動の停滞も経験として語られる。今回の対象者からも、ミドルエイジへの支援の欠如、大学や大学院卒業後アーティストとして認められ、制作や発表が軌道にのって生活できるようになるまでの期間の焦燥、女性アーティストが結婚・出産などにより活動を停止せざるを得ない状況などが語られた。

「ミドルキャリア世代の大変さも先輩たちから聞くんです。40 歳以下までは若手枠で、いろいろ発表の場が用意されていて、公募とかレジデンスとか文化庁の在外研修へ行けるとか。仕事も『3 カ月休みます』とかいって融通利くけど、40 代から一気に発表の場がなくなるっていうのは結構悩みでよく聞きます。呼ばれなかったら発表の場がないみたいなところが結構、本人もきついんじゃないかなと思います」（40 代女性）
「卒業して 25 歳くらいから 30 歳ぐらいまでって全く展覧会呼ばれないし、30 歳ぐらいからバーッて呼ばれだして、40 歳、45 歳ぐらいまでガーッとやって、で、そのあとって、また呼ばれなくなるんですよ。25 歳から 30 歳までの子たちに対してもそういうチャンス

ってか、展覧会、グループショーみたいなやつと公募でやってみたりとかっていうのがありますよね。そうするとまた、もう一回ここからワンステップ行けるというか」（40 代男性）
「作家になってたくさん作品を作りかけて、ちょうどこれからという時に、子どもを 2 人つくりましたので、そこからほぼ制作はできませんでした。非常勤でほんとにぽつぽつと、首の皮 1 枚だけはつないだんですけれど。自分で制作ができない時には、制作に集中してらっしゃる方がすごくいいなっていうふうに思ったりしていました」（60 代女性）
「美術業界ではないところで作品を作っていると、ある種消えていったって言われるけれど、決して消えてはいないというか、むしろ自分がやりたいことをやりたい場所で、評価される場所でそれをやっているだけであって。早く結婚していったん美術から離れて、子どもが大きくなりちょっと手が離れて、クラフトマーケットなどで自分の作りたい物作って売っている人も、業界からは外れてはいるのかもしれないですけれど、いい作品作っていたり、そういうこともいいんじゃないかと。結婚もしないで美術に、作家としてやっていくというのはそろそろ、もう終わってると思いますし、そこだけがゴールではないってことを若い人にもきちんと伝えていけないと、と思います」（40 代女性）

７）社会課題への取り組みとジレンマ

現代美術においては、ソーシャリー・エンゲージド・アート[5]、あるいはアートプロジェクト全体でも、地域やそこの人々との協働により社会課題の解決や新たな価値の創造を目指すタイプのアートが生まれている。昨今は地域活性化などを目的に、そのような活動に公的資金による助成がなされるケースが多い。一方、そうでない表現手法をとるアーティストからは、そのような取り組みと助成支援などが結びつくことに対する抵抗感も語られた。

「アートプロジェクトっていう形が、展覧会という枠じゃないところにも活用できるんだっていうことを、先輩のアーティストたちもすごい活用したと思うんです。キュレーターから依頼されたグループ展の中に参加するんじゃなくて、アーティストがもっとまちづくり、企業との連携とか教育とか、あとはアートプロデュースみたいなことをやれるんだなっていうことを自分も分かり始めて、なので作家として出ない企画にも関わっています。ただし中心の一つにアートがあるものしかやらないようにしてます。展覧会場でやっているものがアートかって言われると、いや、展覧会場の中でやってるもののほうがクライアントワーク、ばりばり販売のためのものじゃんって思うものもあるし、企業案件のほう

[5] アーティストが対話や討論、コミュニティへの参加や協同といった実践を行なうことで社会的価値観の変革をうながす活動の総称

が、これもう美術館の中でできないようなぐらい社会にコミットできる、ワクワクするものもあるなと思う時もあるので、その線引きもかなり曖昧になってます」（40 代男性）
「まち参加型とかまちの人のためにみたいなことばかりやってると、アートとちょっと違うんじゃないかっていう葛藤もあって。でもまちづくりの団体の中でも見えてなかった人たちとアーティストが活動して、まちにいろんなことを還元できている。アーティストがこのまちにいるっていうことが大事なんだなっていうふうにシフトチェンジもして。まちにこびたくないと最初は思ってたけど、別に作品をこびる必要はなくて、でもちゃんと入りやすい場をつくんなきゃいけないなっていうふうに変化しています」（40 代女性）
「最初からまちおこしに協力するみたいなこと、自分たちは関わらないようにしてて。何でかというと、悲惨な例をいっぱい見て。それよりは、そこに若いアーティストが入って友達連れてきたりしたら、自然と近所でコーヒー飲んだりとか飲みに行ったりとかってなるじゃないですか。そういった形で還元できればいいなと。実際そうなりました」（30 代男性）
「最終的にはアーティスト側がやるべきだと思うんです。行政の何かとかじゃなく、自然発生的に起こらないことには何のエネルギーにもならないし。でも大体そういう場所を与えますみたいなのは、プラスアルファ何か還元すること求められるじゃないですか。それもまたやっぱうん？ってなって。でも、それが何のストレスなくやれる人も、アーティストの中にはいて。そういう人がやるしかないのかなっていうような気持ちになる」（30 代男性）

３　マネジメントの必要性

１）セルフマネジメント力と戦略

大多数のアーティストはアート活動に関してはフリーランスであり、プロモーション、各種調整、事務作業を含む諸業務などマネジメント全般を自身で行っている。ギャラリーに所属しているのでなければ、情報発信や売りこみなども自身の手腕にかかってくる。

「自分のことを一番よく知ってるのは自分だったっていう。そもそもアートマネジメントやれる人なんてのは名古屋でどこにいるのっていう感じだから、もう自分でやっちゃったほうがいい。社会的に自分がアーティストとしての場所を確保していくための能力が優れている、それはセルフマネジメントみたいなことです。例えば大学や高校の非常勤を幾つかやって生計立てている人たちもたくさんいるんだけども、それにしたって絵描く以外の別の能力がその人にあるんです」（70 代男性）
「賞をもらったら、ぼーっとしてても何か来るのかなみたいに思ったんですけど、その直後にやっぱ動かないと知ってもらえない。名刺頂いたところに、ちゃんと連絡する。地方っていう強みを使ってしまった部分はあるんですけど、東京にいったら『愛知から来たので、最

近作品増えたので見てもらえませんか』とかですね」（30 代女性）

助成の申請や報告なども、自身の活動を資料にまとめるということが、キャリアの棚卸しや助成対象活動をより深く言語化しようとする動機となり、その後の自身のプレゼンテーションに役に立っていくという効果もある。そのような事務業務が得意なタイプのアーティストもいる一方、やはり不得意に感じる者は一定数存在する。

「もともと、最初に海外渡航の助成申請をした時から、ああいうのを書くのが好きで。申し込み大好きなんですよ。結構、出しては落ち、出しては落ち、なんですけど」（50 代女性）
「海外渡航助成はレポート書かなきゃいけないっていうのが最初プレッシャーだったけど、書かなきゃいけないっていうことで旅してると、何か記憶にとどめておこうとか、誰かと話してでももうひとつ深く話をしたりとかっていう、そういう癖がついたよね」（60 代男性）
「助成金をもらうためにコンセプトをつくったり、展示を考えたり、そもそもこれがやりたいことなのかどうかっていう部分が、やればやるほど分からなくなっていくし、でもそういうのがないと作品が作れなくなってしまったりするっていう難しさ。レジデンスに受かれば、次のレジデンスも受かりやすくなったり、助成金 1 つ取れれば次の助成金も取りやすくなるってなっていくと、もうそれに必死になっちゃうっていうところはあります。それって、本当に作品の作りたいものが作れるかどうかってなって、結局自分の作りたいもん作るなら、自分でバイトしてお金ためて自分のやりたいものを作ったほうが、効率がいいかもしれない」（40 代女性）
「助成金でやっていくアーティストもいるんです、助成金を渡り歩いてみたいな。それ得意な人はめちゃ得意で、それ用のテンプレートがあって出すみたいな。でも結構そういう助成金の人たちって、お金を出す人たちはそこまであまり美術の関係のない人たちが母体で。そうすると美術に関係ない人にも通じる言葉で書かれてないと駄目じゃないですか。それは言葉を主戦場にしてないアーティストは書けないというか」（30 代男性）

一方、フリーランスでも必要な契約や経理、広報などのマネジメント講習などを受講する機会が少なく、そのような機会の創出を望む意見も聞かれた。

「著作権とか契約に関する知識などは、広い意味の教養でやるべきなんだろうけど、あまりそういうのが日本では発達していないというのはあります。だからそういう講座は、オンラインでもこのクリエイティブ・リンク・ナゴヤなんかで、やるといいかもしれません」（60 代男性）

２）ギャラリーにおけるマネジメント機能

ギャラリー所属作家の場合、マネジメントはギャラリーが引き受け、今後のキャリアプラン、ブランディングなどもある程度相談できるため、アーティストにとってギャラリーは作品制作に専念できるという理想的な環境になる。しかし、アーティスト自身が情報発信だけおこなっても、その後の販売や発表の機会にダイレクトにはつながらず、効果に関してもジレンマを感じている。

「ギャラリーに入っている人たちっていうのは、新作の作品の撮影全部して、ホームページに載せて、展示企画してとかも全部ギャラリーがやってくれるけど。だから次につながるし、外にも広がっていくんですけど。それをいくら自分でやったところで、ギャラリーっていう作品を売る所の保証みたいなのは存在しなくて」（30代男性）
「海外での発表も、ちゃんとそこの場所の情報を知らないと全然違うジャンルのところだったら、『そういうジャンルの人だ』っていうの見られるので、所属ギャラリーと相談しながら決めたい」（30代女性）
「アーティスト1人じゃなくて、要はサポートするギャラリーだったりとか、何かしらっていうふうな形がある程度、そういうフォーマットで仕事ができる環境をつくれるっていう。それが成功し得る鍵になるんだろう。インターナショナルなコマーシャルギャラリーだと、作家をそこで扱いますよってなったら担当付いて全部やってくれるわけですよね。作家はある程度、作品を作ることに集中できるという環境になる」（40代男性）

３）マネジメント機能・人材とポジションの不足

名古屋圏では、アーティスト人口の規模に対してマネジメント機能が不足しているという意見は大多数を占めているが、マネジメント機能が存在するためには、マネジメント人材の育成、その人材を雇用する組織・ポジションが必要である。育成に関しては名古屋圏に美術大学はあるが、アートマネジメント人材養成の学部は少数である。また、現代美術を取り扱う美術館は多いが学芸員は分野ごとに人数も限られ、基本的には自館の業務に関わる範囲での取り組みとなる。国際芸術祭あいちをはじめとするアートプロジェクトもいくつも存在するが、ほぼ任期付きの雇用であり、全国の地域芸術祭を渡り歩くというキャリアを強いられ、長期的な人材の定着には課題がある。

「マネジメント不足っていうのは明らかです。アートプロデューサーやアートディレクターという人たちが、あまりに恵まれてない。助成なんかでもアーティストには支援しますけど、アートマネジメントのほうには支援するってことはないわけです。マネジメントがいれば握ったお金を作家にどう配るかみたいなことっていうのは、出てくるわけだし、そこにユニークさも出てくるんだけど、圧倒的にみんな下手くそですよね。音楽は総トータ

ルが大きいので、マネジメントをして何とか食えるっていうところがあるけども、美術はマネジメントがほんと育たないです。その割には専門知識がすごい要るし、まず学芸員並みの知識は要るし。マネジメントはお金ですから、どういうふうにお金持ってきてどういうふうに展覧会を成功させるかっていうのが、これはもう東京でも全然駄目だと思ってますけど、東京のほうがチャンスが多い分だけ人材もいるっていうだけです」（70代男性）

「アートに関わる人間が一番、育成されるのは美術館。オルタナティブがあるとすれば新聞社などメディアの文化事業セクション。両方のノウハウを持ってたほうが、要するに宣伝ができて、現場を一応、難なく管理・運営みたいなところもできる、金の計算もできる、でも学芸もできるって、両方の頭を持った人間がこの地域にいるといいよねっていうのがある。公立美術館は学芸員と総務部しかいなくて、運営に関わる人間は全部、外注。金のところがごっそり抜けてて自分たちでやりたがらない。そこをやらないと一体構造で物事、考えられない。企業なら、企画考えて、総務やって、人事やって、金計算するけど、文化の人はそれをやらない。結局、人は育たないし、そこがすこーんって抜けて、もう何もできませんみたいな形になっちゃうので。でもそれができるようにならないとうまくいかない。ただし学芸員は専門性ってことがあるから。失敗するパターンは、行政がわーっと入ってきて絵を描いて学芸員をつぶしていく。それは絶対やっちゃ駄目」（50代男性）

「名古屋大学は先生方が、基本的に学問の先生しかいないから、授業も現代アートなんてほとんどないし、学芸員資格を取る人はいるけど、ほとんどそういう教育がなされていないんですよね。で、現場に行ってびっくりするんです、学芸員って。結局学芸員がなんでもかんでもやるもんだから、専門を分化していない。コーディネーター職みたいなものが文化施設とかそういうものにもっと需要があれば、当然ながらそういう大学院ができると思うんだけど、結局需要がない、教育もないし。エデュケーター養成してたって、エデュケーターとして採る博物館って、ほとんどいない。博物館法で学芸員だけじゃなくて、そういう連携的なスタッフをジョブ型の職種として確立していかないと、難しいんだろうなと思います。（公立美術館では）事務方でも間に合う人いますよね。だけど、3年ぐらいたつと他の部署行っちゃう。そういう人が残って、PR活動とかコーディネートやってもらって、それが5年、10年の単位でいられるようになるといいんですが」（60代男性）

「物を作りたい学生と、アイデアはあるけどもしかして自分の手で作らなくてもいいタイプの学生と、あと、アーティストとして活動をしていくタイプではないキュレイター志向の人たちとはすごい近いところにいると思うんです。大学にプロデュースとか批評キュレーションのコースがあったりすると、作るタイプの学生であってもそういう授業を聞くことはできるし、いろんな交友関係の中でそういう知識のやりとりっていうのは自然に出てくると思うんですね。そういう教育環境がこの地域でどのぐらいあるかっていうのはわからない」（40代女性）

「作らない立場の人っていうのも美術関係の生態系の中にはいて。よっぽど特殊な立場に

ならない限りはやっぱり（アートプロジェクトごとの）間の仕事が切れるわけなんですよ。よく人材育成って言われますけど、育成はされていて、すごくみんな頑張って働いて、新しいスキルもあって、キャリアアップにおそらくなってると思うんですけど。実際、美術館の学芸員になったり、他の芸術祭手伝ったりとか活躍してるんですけど、ずっと次もここに関わってほしいっていうスタッフを残すことができないっていう課題がいまだに解消されてないですね。全国共通に、あらゆる地方都市はそこが悩みなんです。県ができないんだったら、それこそ市がやるとか。そういう、どこかお互いの受け皿になって補完し合うようなことができたら、ちゃんといい意味での競合関係ができるんじゃないかと思うんですけども」（40代女性）
「自分の世代はちょうど美術館の学芸員の募集が結構なかったんです。逆に、トリエンナーレとかアートセンターとかができた時代なので、そういう所に就職するというかスタッフになる子が多かったです。いきなり現場やるみたいな状態で、学ぶっていう感じ。で、渡り鳥するっていう人がすごく多くて、3年ごとにみんなが横浜やって愛知やって札幌行って愛知来て札幌行って、みたいなことでしんどい。2年ごとに引っ越して。独身の女性しかできないです」（40代女性）

４　名古屋の美術のインフラストラクチャ―

１）美術館

現代美術を扱う美術館は、公立、私立含めて名古屋および名古屋近郊に多く存在し、企画展や個展によるアーティストの発表や評価の場であるとともに、アーティストにとって重要な作品購入や収集の場としても機能している。専門人材として学芸員が調査研究を行い、現存アーティストとの交流を行うことで、地域のアートコミュニティ形成やアートシーンの活性化に大きく寄与している。このように当地域の美術館は全国的に見ても活発な活動をしているとの評価も多い。

「名古屋市美術館、愛知県美術館、豊田市美術館など公的な場所は結構あって、東京なんかよりもずっと露出度は高いんじゃないか。地元の作家も含めて、現代美術の露出度は高いような気がする」(50代男性)
「豊田市美や愛知県美の学芸員さんとかが結構すぐ作品見てくれるじゃないですか。どこの館の人であれ結構、来てくれる環境にあるっていうのはすごくいいと思うんですよね。関西ではなかったですから。学生とかのイベントでも来てくれるって感じですよね。触れる機会は多い気はすごくしてます」(40代男性)
「名古屋市美のポジション展は、まだ定期的にやってるよね。愛知県美はARCHはなくなったけど、(若手作家の作品購入は）大村知事がトップダウンで予算をつけて」(60代男性)

一方、公立美術館の予算の減少や活動の変化により、地元現代作家を紹介する機会が減少し、それにつれてアーティストとの人的交流も縮小気味である。美術館のレベルの高さから学芸員も全国区であり、地域への関心が薄い傾向が懸念され、公立美術館で地域のアーティストを取り上げる意義を再認識してほしいという意見も聞かれた。

「(名古屋市美術館や愛知県美術館での地元作家の展示の）機会が減ってますよね。美術館も予算がないのは分かるんですが。展示もオルタナティブ・スペースでやるのと、美術館でやるって、たぶんアーティストとしてもキャリアの面で全然違うと思う。その先に非常勤講師が決まったりとか、レジデンスが決まったりとか、結構影響してくると思うんです」(40代女性)
「(美術館と地域は）永遠の名古屋の課題でもあるんです。愛知県美発足時、名古屋は非常に地域の色が強かったけど、愛知だけど全国で通用するレベルのものをやっていかなきゃいけないっていうのがあったんで、展覧会も地域の作家を定期的に取り上げるってのはあんまりやってなかった。学芸員も若い世代はかっこいいアーティストばっかり扱って、地域にあんまり目を向けなくなってしまう。学芸員は地域出身の人なんてほとんどいないし、地域に関心がないという人が多いので、それをミッションとしてどれだけ各自が内面化できるか。だから世代のギャップがあって、アーカイブとか作品が、散逸してしまう。関心を持たないので、現場のネットワークが切れてしまう。あとは収集活動が停滞しているので、学芸員が現場を回る意味が、だんだん減っているということもある。やっぱり少しでも購入予算があれば、みんなで知恵絞っていい作家探そうと思うじゃないですか」
（60代男性)

２）ギャラリー

今回のインタビュー対象者及び関係者が一様に口にするのは、1980年代から90年代頃にかけて名古屋市内には現代美術の有力ギャラリーがそろっており、大型スペースを構えて海外アーティストを招聘するなど、全国的に見ても先進的な地域であったという。現在日本を代表するキュレイターが名古屋でそのようなギャラリーで企画を担当していたケースも見られた。その頃は、ギャラリー中心に主催されたアートフェアも実施されている。その頃と比べると現在は、名古屋市内のギャラリーは縮小気味という声が聞かれる。

「バブルのころは、名古屋って現代アート最先端のまちのひとつだったはずで。例えば毎週末、東京から名古屋のオープニング見に来て飲み明かして帰るみたいな人もいた。いとうせいこうやYMOのメンバーがきたよ、なんて話も」(40代男性)
「80年代初めに東京の美術大学に入学して、その当時は『現代アート、名古屋だよ』っていうのは東京でもいわれてた。名古屋のギャラリーのほうが何かちゃんとしたギャラリ

ー、それはギャラリータカギさんとか南條史生さんがいたICA NAGOYAとこかのことを指すんだろうけれども、『ちゃんとしたギャラリーが名古屋にはあるんだよ、だから名古屋はすごいらしいんだよ』っていうのを聞いていた」(60代男性)
「90年代初期はまだ東京も今のように画廊の数もなかったと思うし銀座に行って回って見るしかない。その中で地方の都市にしては、東京に続いて名古屋が頑張ってるっていう印象だった。なので、当時は名古屋でやっていれば発表の場があるのかなと思ってたんですけどね」(50代男性)
「名古屋には、現代美術のかなりしっかりしたギャラリーがあったので、ギャラリーに声をかけられる人っていうのは、それなりに安定した力のある人だったとは思います。その構造は、ちょっと今は難しいですね」(50代女性)
「(大手のギャラリーが少なくなり) 昔の人は困ってる。風呂敷から始めたような、教育しながら売ってくような目利きというか、昔の人は。そういうのが、どんどんネットとかいろんなことがあって、通用しなくなって。ひどい時なんかほんとに画廊に絵を見に来て『いや、ネットで買います』みたいな」(60代男性)

現在はギャラリーも東京中心の傾向が強くなり、東京のギャラリーに所属しながら当地域に在住し、制作・発表するアーティストも多く見られる。名古屋圏の美術大学にも卒業制作展を中心に東京のギャラリーの担当者が視察に来たり、担当者がレクチャーなどで招聘されるケースもあるという。一方マーケットがグローバルになるにつれ、アートフェアが主戦場になる傾向もみられる。

「(作家は) 作るのはここでいいんだよね。名古屋で作って東京で発表するっていう。名古屋の大学の先生やりながら、東京で発表してく人たちも」(50代男性)
「2000 年代の前半頃、今は六本木にあるギャラリーの人たちが、がんがん美術大学の卒展の段階でもう作家を『うちの所属にしよう』みたいな動きがたくさんあって。そこで拾われたというか、ギャラリー所属した作家は今でもずっと活動してる」(40 代女性)
「卒展や修了展などにギャラリストがばーっと青田買いみたいに来る現象、まだありますけど、愛知まで来てる」(40代女性)
「名古屋でも私立の美大では、画商さんに定期的にレクチャーやアトリエ訪問してもらって、ということを積極的にやってるコースもありました。そうしないと名古屋にもう今画廊が減ってるし、関西とか東京の画商さんで、なかなか名古屋まで来る人は少ないので」(60代男性)
「名古屋はギャラリーって確かにコマーシャルはないし、ギャラリーが多いかっていったら、東京とかと比べたら多くはないと思う。東京と比べたらそれは不利益かぶってるよねっていったら、そうですよねってなるけど、経済規模が違うって話。それと今アートフェアが主体になりつつある。ギャラリーはほんとになんかもう宣伝の1つっていうか、拠点

っていうかな、閉じちゃう人もいます。もうそっちだけでやってる」（40代男性）
「東京には何があるかっていうと、要するにコレクターを持ったギャラリストがいるっていうことなんだよね。彼らはしかも、今ほとんど売り上げは日本じゃなくて、海外って言ってるから、アートフェアだよね」（50代男性）

３）アートプロジェクト

当地域でも従来からさまざまなアートプロジェクトが行われてきたが、現在も継続中の大きなプロジェクトは国際芸術祭あいち（旧あいちトリエンナーレ）である。海外および全国から一線級のアーティストが集い、地元の作家や芸術関係者との交流を生んでおり、スキルアップの場となっている。また全国からアート関係者や愛好家が訪れるため、地元から出品する作家にとっても全国的に発信するキャリアアップの機会となり、また一般市民にも浸透しているため、アーティストの社会的信用の裏付けともなる。そのほかアッセンブリッジ・ナゴヤなど様々なプロジェクトがあることにより、名古屋圏の現代美術が全国的に見ても存在感を持つ要素となっている。

「実際トリエンナーレが、そういう地元で力はあるけどローカル枠って思われてた子を全国区にする可能性が結構高くって。いろんなとこから見に来てくれるのでっていうのはあります」（50代女性）
「（作家になるのを親に）許してもらえたのは、あいちトリエンナーレに出たのがきっかけで。トリエンナーレってやっぱり電車とか新聞とかいろいろメディアに出るじゃないですか、テレビとか。そういう分かりやすい媒体に出るとすごい安心してくれて。コマーシャルギャラリー入ったって言っても、あんまりよく分かんないじゃないですか」（30代女性）
「（名古屋がアート関係者にアピールできるというのは）あいちトリエンナーレがあることも一つのPRになってました。定期的な芸術祭がやっぱり開催されていて、それ目掛けて人の流れもあって。アッセンブリッジ・ナゴヤは外から来るアーティストと、名古屋のアーティストが混ざる場としてはすごい良かった。あいちトリエンナーレとかになってくるとそこまで、ビッグアーティストとかで地元のアーティストと知り合うとかなかなかできなかったんですけど、ここは結構そういうのもさせてくれた感じ。県外から見てもすごい成功例として見えると思うんです。展覧会がありながら、ちっちゃい空きスペースみたいなんとかでカフェがあったりギャラリーがあったりしてる中に、中期的な芸術祭としてのアッセンブリッジをやってる状態ってすごい、なかなか実現できない状態をつくれていたんじゃないかなと思いました。トリエンナーレで引っ越してきた人たちが次、働く場としてもアッセンブリッジが機能していた」（40代男性）
「（トリエンナーレと地元の作家は）制作のサポート、例えば美術大学の学生とか教員の手

を借りるっていうのもありますし、どういうふうにこの作品を実現できるだろうかっていう技術的なアイデアの相談だったり。あとは実際にその造形屋さん、発注先みたいなものの紹介だったり、いろんなレベルの制作のサポートがあります。過去に参加した作家が別の枠組みのプロジェクトに参加をしたり。主催事業じゃなかったとしても、連携とかそういうところで自分たちの自主的なものに関わる人もいたり。ラーニングのほうにもわりと毎回、複数年、過去のアーティストとかマネジメントとか、いろんな立場の人がスタッフとして関わっている。内外の行き来がわりとありますね」（40 代女性）

一方、アートプロジェクトに関しても財政的な面や活動の持続可能性、市民との関わり、世代交代などの点において課題も語られた。

「今、芸術祭がもういっぱいこの辺でも発生してますでしょう。まあびっくりするぐらい金がないですもん。だからマネージャーがそこに入るなんてとんでもない話で、みんな作家の中でそういう能力のちょっと高い人が面倒見て、自分の制作時間削ってやってるっていう感じです、どこもかも。とにかく総予算が多くて200～300万ですもん。いろんなことやったら人件費なんか当然出ないし」（70代男性）
「なかなかみんな持ち出しでやってるんじゃないですか、アートプロジェクトで。でも、箔が付けばっていうことでやってるけど、なかなか難しいですよね」（60代男性）
「（国際芸術祭あいちなどでも）ラーニングプログラムが3年に1回ころころ変わるんじゃなくて、継続的にアートと人々をつなぐっていうラーニングセンターみたいなのあったほうがいい」（40代男性）
「トリエンナーレ2010からずっとボランティアやってるおじいちゃんおばあちゃんとかも一定数いて。彼らは大切にしていかないといけないんだけど、全然、やっぱ世代が上がってってる。この10年かけて」（40代男性）

４）制作場所、アーティスト・ラン・スペース、オルタナティブ・スペース

美術において名古屋圏の利点としてしばしばあげられるのが、制作場所が比較的安く確保できるということであるが、美術大学が名古屋市内ではなく近郊にあるということもあり、近隣で共同でスタジオを構えるというアーティストが多く見受けられる。一方昔から作家が運営するギャラリーもあり、制作場所をシェアスタジオとして運営しながら、展示公開やイベントなどを行うという形態も、昔から多くある土地柄でもある。アーティスト・ラン・スペースの多寡は公的なアートプロジェクトにも影響を受けている。

「名古屋芸大近辺だと、今は違うかもしれないけど、4、5万あれば家が借りられて、車も適当に停められて、軽トラ乗って、家で製作したり、それをまた展示に持ってったりとか

できた」(50代男性)
「横浜の黄金町もBankArtなどレジデンスがありますが、思うに、名古屋では難しいかなと思います。東京近郊、関東はあんまりスタジオを持てなかったりってのがあると思いますが、名古屋はスタジオは持ちやすい。安かったり広い空間があったり。友達とシェアしてアトリエを持てるっていうので。だから良さでもあるんですけれど、制作する場所があるので続けられるっていう。だからお金を出してまで、そういうレジデンスに参加する人がいるかって言ったら、少ないと思います。ギャラリーも横浜よりは名古屋のほうが多いし行きやすいです」(40代女性)
「名古屋では美大がその頃から県芸、名芸、造形とか3つ4つあるわけですね。そこの卒業生の発表の場所が、それほど豊かではなかった。それもあって、自分たちでアーティスト・ラン・スペースを作り始めるんですよね、80年代に。それがすごく特色、あとまちなかでやり始める。自分たちで本当に小さい画廊を始めたりとか、自転車屋の奥だったりとか酒屋の隣とかいろんなところがあるわけです」(60代男性)
「(あいちトリエンナーレ以前に) あんなにたくさんアーティスト・ラン・スペースがあった、あの時代っていうのは、文化行政がなかったからとも言えるんですよね。トリエンナーレが準備段階、始まった時から、どんどんアーティストに対する展覧会の機会であったり、スペースの創設であったりとか、いろいろ文化行政が助けてくれるっていうことが増えましたよね。昔よりも、特に若手はどんどん声がかかるようになって。早く初めの発表の機会を持てたりとかはできるようになったんです。もしかしたら、大きい展覧会に呼んでもらえるかもしれないっていうような感じがあって。そうするともう、自分のスペースなんかやってられないわけですよね、忙しくなっちゃって」(50代女性)
「でも、やっぱりそうやって支えてもらって、何とかなるかっていったら、ならないっていうのが一つはある。公的に何か取り上げられてもらう機会は増えるんだけれども、当然全く声がかからない人っていうのもいるっていうのと、あとは声をかけてもらってるけれど、アーティストとして次のステップに進めない。一方、全然逆向きの理由としては、お呼びはかかるようになったけど、やっぱり制作場所ないから制作場所は何とかしなきゃねって」(50代女性)
「トリエンナーレの直前の2009年頃は美術館とギャラリーしかない印象で。その後、ダンスハウス黄金4422ができたり、コットンビルができたり、トランジットビルがあったり、長者町にも幾つかあったりっていう、発表する場は結構増えているのかなと。あと瀬戸のBarrackとか。あとはアーティスト・ランでやっていたGOHONっていう所もあった。そういうアーティストたちが立ち上げた場も幾つかあったりして、変化は10年の間にあったのかなというのは。発表の場っていう形でいうと、そういう文化の施設としてじゃない、美術館とかではない場所で何か立ち上がってる印象はあります」(40代女性)
「今はインディペンデンスっていうか、オープンスタジオに近いようなギャラリーがある。コマーシャルギャラリーは少ないんだけど、発表の場を提供するっていうところは若

手のほうから出てる気はします。ただ、それが売れるとかそういうのには、まだそんな直結はしないんだけど。ただ、そういうところも、割と評論家がしっかり回ったりしてるから、そこで取り上げられて、例えば名古屋市美術館でグループ展に召集されるとかの引き上げ方は今起きてますよね」（60代男性）

５）美術大学

名古屋および名古屋近郊には、愛知県立芸術大学、名古屋芸術大学、名古屋造形大学と３つの美術大学があり、総合大学の中にデザインや映像メディア、建築などの専攻がある大学も多く、毎年芸術関連の人材を輩出するとともに、教職としてのアーティストの雇用を創出している。彼らが名古屋圏の美術業界の人材として果たす役割は大きい。この地域の傾向としては、ペインティングの作家が多く評価されているという。

「愛知県芸大、名古屋造形大、名古屋芸術大、名古屋学芸大も含めて、他の都市に比べたら美大がすごい多いので、やっぱり作家が輩出している気はします」（40代女性）
「教員にどういう現役の作家がいるかっていうのは大きいと思うんですね。県芸はそういう意味で、現役の作家が教員やってるので、そこは学生にとってもいい刺激になるんじゃないかと、ロールモデルとして」（40代女性）
「（愛知は絵画志向が強いというのは）やっぱりまだその傾向は強いと思います、圧倒的に。もちろん、いろんなことやりたい学生があって、たまたまあって初めに絵っていうものに出会ったのかもしれないんですけど。絵画っていう部門に限らず、自分の手で何かを作り出したいっていうタイプの学生、要するに一人で作る、物として物理的に自分でちゃんと何か作るっていうことに興味を感じてる学生が多いように思います。何か作りたいアイデアがあって、それを誰かの助けを借りてでも形にしていくっていうものだったり、本当に大人数で作家の作家性をどこに置くかみたいなことを問いかけてみたりなほうではなくて」（40代女性）

なかでも愛知県立芸術大学は全国でも数少ない公立で専門の芸術系大学とあるということもあり、全国から学生を集めているが、少子化による大学志望者の減少や留学生の増加は、当地域の美術大学も無縁ではない。

「愛知県芸大は、倍率2～3倍はあると思います。県芸狙いの人は遠くから来てる人が多いかもしれない。私立大学は、少子化なのでほぼ全員入れるっていう状態で、今、学生も8割東海圏の人ですね」（40代女性）
「（受験倍率は）普通の受験科に比べたら落ち込まないんですよね。一定数、美大志望者っていうのはやっぱりいるみたいで。落ち込み方はだいぶ緩やかです」（50代女性）

「大学院は日本人はすごく少なくて、留学生が多い。日本人は奨学金を返すのがすごく大変なので。中国は美術大学の狭き門のブームみたいなものがあって、そういったのを通ってきた人たちが日本に来て、博士課程まで行くっていうことは多いかもしれないです。博士号はほとんど中国の方」(60代女性)

６）報道、評論

作品を展示したときの評論や報道は、アーティストにとっての実績となる。名古屋圏は地元紙も全国紙あわせて新聞でも地元の作家を取り上げて紹介したり批評する文化があり、比較的掲載される機会はあった。

「馬場駿吉先生に評論を書いていただいたのがやっぱり大きかったかもしれないですね。そういった評論的なこと、作品を言葉にしてくださるっていうことは、すごく作家にとっては励みになるし、指針にもなります」(60 代女性)
「新聞から取材を受けて、載るとみんなそれを見てすぐ理解してくれる。やっぱり新聞っていう公的機関からちゃんと取材を受けて紹介されると何かすごい一気に風通しが良くなった」(30 代男性)
「東京とか京都とかだと、20 代、30 代の若手を一般紙の新聞が文化面で扱うってことは、ほとんどないんじゃないかなと思います。中日新聞の場合は、紙面は減ってますがまだ機会は残されていて、マスメディアとして発信はあると思っています。名古屋はまだ恵まれてるほうなのかなと思ったり」(40 代男性)

しかし、かつて名古屋圏のメディアとして中日新聞、名古屋タイムズの他、全国紙の地方版でも文化欄は重要コンテンツであったが名古屋タイムズは休刊、全国紙も地方版縮小でレビューの掲載の機会は少なくなっている。全国規模の美術雑誌もかつては地方の展覧会の批評欄が機能していたが、紙媒体縮小の時代となり、コロナ禍の影響も相まって掲載の機会は激減している。そんな中では、美術関係者が有志で発行する芸術批評誌『REAR』が定期的で貴重な批評の場となっている。

「名古屋にないものっていうのはメディアで、圧倒的に欠けている。日本は完全にメディアは東京、東京のメディアしか皆、見ないじゃない。だから PR する術がない。評価軸をつくるのには言葉が要る。中日新聞の記事でも何でもいいんだけど、それがすごく大事っていうのはそこだと思う。この地域は中日さんだと思う。言葉がないと駄目だし、励みになるのは文章なんで、そこはちゃんとやる必要がある」(50 代男性)
「名古屋にアーティストがなんでいつかないかっていうと、やっぱり暮らしていけないからでしょう。あと、やっぱり評価してくれる人が少な過ぎるということですか。媒体もない

し、新聞もあまり駄目だし、ぴあも名古屋はなくなっちゃったし」（60 代男性）
「中日新聞も外部ライター依頼の批評が、コロナの前までは、小さいけれどもあったし、美術評もあったんですよ。それがもう今、なくなっちゃってる。批評を書く機会が 2 年間止まってたわけで、腕を磨く機会がなかったわけだから、すごくもったいないことですよね、この地域の文化の芸術の世界にとっては。発表の場があるから、批評する人たちも眼が鍛えられるし、耳が鍛えられるっていうのはあると思うんですけど」（40 代男性）
「美術雑誌はほとんど展評もないから、あと新聞も展評なくなっちゃったから、名古屋ってもう『REAR』ぐらいしかなくなっちゃったんだよ。だから即時的な、今やってるものの告知っていうのはほとんどネット上しかないね」（60代男性）
「『REAR』がここまでやれてきた理由って、視野の広さと切り口の面白さだと思っていて。定期購読で購入する方がいたり、特集によって買う方もいる。単なる情報誌ではないので、おそらく論点の部分に興味を持っているのでは。編集チームの力です」（50代女性）

５　芸術活動の場としての名古屋

１）名古屋を活動拠点とする理由

今回のインタビュー対象者は、ほぼ名古屋や近郊に在住して制作し、名古屋圏あるいは全国で発表をするというスタイルをとっている（あるいはとっていた）。大半は大学進学や、大学や美術関連業務などでの就職を機に名古屋圏に移住している。名古屋圏で活動している理由としては仕事の存在の他、首都圏と比べて生活や制作におけるコストが低く抑えられるということ、ほどよい規模のアートコミュニティの存在、現代美術に触れる機会の多さ、首都圏にも関西圏にも近い地の利などがあげられた。

「地元が一番落ち着くのと、制作と生活とか全部のバランスがここが一番取りやすいですね。東京は展示があり過ぎると疲れちゃうし、身軽に動けちゃうとその分細かな仕事が増えて、ちょっと脱線しちゃうんじゃないかって心配も最近思ったりして。ここでこつこつと絵だけを描くっていうのがちょうどいい感じです」（30代女性）
「東京にも近い、大阪にも近いはやっぱすごくメリットだし。僕らぐらいのアーティストだとやっぱ一番困るのって、展示する時の運搬なんです。（東京は）チャンスもあるけど、やっぱそれも数が多過ぎちゃうからピンからキリまでいるんですよね。どれがチャンスといっていいのか、もはや分からないみたいな感じのところが多くて。名古屋とかだとチャンスの数は少ない分、つながりは密っていうのがやっぱすごいメリットで。例えば卒展でうちで展示しませんかみたいなふうで声を掛けてもらってやれたとしたら、大体の関係者はそこを見に回ってたりする。例えば学生が主体で展示を企画したとしても、美術関係者とか、美術好きの人が見に来れるぐらいの数しかないんです、全体の総数が。だから

分散しなくて。そうするとだんだんこう認知されやすくなっていくじゃないですか」（30代男性）
「大きいアトリエ探そうと思えば探せるし。それですよね、やっぱり。名古屋にいると、ちょっと郊外行けば大きいアトリエが何となく用意できる。東京だとやっぱりスタジオを用意するの、本気で大変みたいで。東京のアーティストが名古屋に遊びにきて、『こっちにもう移っちゃおうかな』みたいな空気が結構あったんですよ。実際に居着いちゃった人もいますしね。作家も多いし、まあそれなりに都市圏でもある。単に、誰も知り合いがいない田舎に行くのとはだいぶ違う」（50代女性）
「自分が来た1990年代半ばからもう東京集中っていうのは始まってて、でも名古屋では現代アートで、フランク・ステラとか見れたし。名古屋市美術館のARTEC[6]とか、デザイン博とか、茂登山清文先生が関わっていたメディアアート系の活動などが、名古屋にはあった」（60代男性）
「（名古屋圏の）大学出て東京に行くと、物価も高いし、当然東京の美大から出遅れ感があって。ネットワークもないし、引き上げてくれる人もそんなに。だったら愛知でやってて、脚光を浴びて、VOCA[7]とかいろんな企画で引っ張られたほうが確率高いよねって。だから今、そっちも増えつつあんじゃないかなって。昔は名古屋飛ばしとかいろんなことあったり、評論家も通過してっちゃうみたいなことあったんだけど、最近はそのへんはよくみんな見てる。卒展やってもいろんなとこから来るし」（60代男性）
「（名古屋圏の作家は）いろいろ追われて仕事はしてないですよね。自分たちの時間をちゃんと持てて、仕事できてるような気がしますね。東京のアーティストに比べると。なんか愚直にやってる人って残ってますよね。時間の流れ方が違うんだな」（40代男性）
「東京に住んでたんですけれども、名古屋はめちゃくちゃ便利なんです。かなり透明になれる町だなと思ったんです、当時は。結構すぐに人と人が仲良くなったり、住みやすい町だなと思いました。家賃も東京から来たんで安かったんですよね。あと美術関係の仲間が先に住んでいたのは大きかったです。不満は、むしろないです」（40代男性）
「東京の方が卒業して結構消えてく、消えてくって言い方変だけど、制作続ける人は少ないような気がして。やっぱり愛知の方がコツコツと継続してやってる人の方が多いんじゃないかなと思って。発表してなくても」（50代男性）

---

[6] 「名古屋国際ビエンナーレ・ARTEC」1989 年から 1997 年まで名古屋市美術館等で開催されていたメディアアートの美術展
[7] 「VOCA 現代美術の展望・新しい平面の作家たち（Vision Of Contemporary Art）」1994 年から開催されている、若手作家の平面作品を対象とした展覧会

２）東京でのサバイバル

今回のインタビュー対象者の中でも、名古屋圏との比較で例に出されるのは良い面でも悪い面でも圧倒的に東京であり首都圏の状況である。東京出身者や大学、就労などで滞在した経験がある者からは東京の魅力とサバイバル能力の必要性についての語りが多かった。

「東京に残る子は多いんですけど、東京の美術界の感じに適応できる子ですね。名古屋もちょこっとそんな雰囲気出てきましたけど。やっぱり自分自身をプロデュースしないと残っていけないので、若い子たち、疲れてます。『消費されてるなって感じします』って言って。東京は特にしたたかにやれる子がまず出てくるけど。コマーシャル的な意味でいっても、やっぱり東京のほうがでかいので、っていうのもあります。商売熱心ですしね、ギャラリーさんも」（50代女性）
「そこでの戦い方を身に付けて戦っていかないと、上がっていけないというか。しかもそのコミュニティによって全然違うんです、その戦い方が。関東のメリットは結局そうやってすごい速度感で、いろんなコミュニティがあって、やっていったところのそれぞれがもうちょっと広い、だから海外とかとの広がりみたいなのを、やっぱお金が大きい分、さらに広がってきやすさはあるのかなっていう。名古屋とかってなるとやっぱ内に内にっていうのがメリットな分、あんまりこうそこからさらに広い場所へっていう感じはないのかな」（30代男性）
「東京のほうが人数が多い分、そんなに、プレーヤー同士の密な関わりみたいなのあんまりなくて、名古屋のほうがそういう、自分たちが主体的にいろんなものに関わってるなっていう認識がありました」（40代男性）
「東京のアーティストたちがものすごく充実したアーティストライフを過ごしてるかっていうと、どう？っていう感じがするけど。キャリア構築っていうよりもサバイバルだよね。アーティストがサバイバルするためには関東に集まっていったほうが、寄っていったほうが絶対的に生き延びやすいよね。東京は難なくコレクターがいるように思う。コレクターたちが交流し合ってるっていうかビジネスネットワークをつくっていく。ゴルフもやるし、作品の話もする。そこでネットワークをつくっておくと、自分の会社がサバイブできるっていう考えで、名古屋は別にそこまでやんなくてもサバイブできる。東京ではミニコミュニティみたいなものが多分できてて、森美術館が成立している。じゃあ、名古屋にそれが必要ですかっていわれたら、どうだろうって」（50代男性）

３）外から見た名古屋のイメージ

東海地方を中心に社会的流入人口は多い名古屋市だが、全国的に見た名古屋圏の特色は薄く、とくに印象がない街ともいわれる。美術においてはペインティングを中心に特色が

あるという声は多く聞かれたが、情報発信がうまくなく人的交流も盛んでないという声も聞かれた。

「国際的な枠組みの中にいると、自分の作品だけでやっていくか、あるいはいいビジネスパートナーとしてギャラリーと組むか、いわゆる大きい国際展などの機会、そういうプラットフォームを利用して、活動の幅を広げていくか。そういう意味では、名古屋っていう市の単位で見ると、まだここはどういう土地なのかっていうことがそもそも知られていないんじゃないかなっていうふうに感じます」（40代女性）
「（他の地域での名古屋の話題は）僕も結構言うんですけど、言った相手になんか響かなくて、いつも困る。関心をあまり持たれない。美術の人とかだったら、あいちトリエンナーレとか言う人がいるけど、そうじゃない場合、あんまり反応が返ってこないというか、行ったことありますよって言われるぐらいで、会話にならなかったりして」（40代男性）
「やっぱ名古屋ってちょっと地方な感じするよね。大阪だとちょっとかっこよくて、東京はもっとかっこよくて。自分は若い頃、別に東京は関係ないと思ってた。名古屋の美術館の学芸員の紹介で、アメリカだったりオーストラリアだったり、オランダとかの展覧会に出品もしていたので。それからずっとそういう話がなくてここにずっといると、やっぱり田舎だなと」（60代男性）
「三大都市圏って言ってたら名古屋になるのかもしれないけど、でも他のとこだって、同じ規模だったら福岡、神戸、大阪だって、もうちょっとその他の地域との交流とかある」（60代男性）

一方、美術関係者の中では、絵画を中心に独自の文化圏を築いているという評価もある。

「昔はやっぱり東京行ったほうが良かったんだけど、最近は、愛知は愛知で割とこう、注目されてるところがある。80年代当時、あらゆるメディア、ニューペインティングから始まって、写真とかいろんなジャンルが脚光を浴びて、各美大もそういう授業とかしていたんだけど、ここは田舎で、閉ざされてるってわけじゃないんだけど、どことも交流してなくて、みんな地道に油絵描いてたんですよ。そしたらバブルが弾けました、きらびやかなオブジェとかいろんなものが『ちょっといいわ』っていう感じになって、ちゃんと現代美術でペインティングやってる人いないのってなった時にこんなとこにいますって」（60代男性）

４）名古屋でのアーティストの生き方

アーティストとして活動している以上、アーティスト活動の収入だけで生計がたてられ

ることが一番の理想である。最近ではそれを目指してキャリアアップを図る作家が名古屋圏でも出現しているが、安定した状況になるまでは、大学卒業後一定の期間を要している。

「(2010年の）あいちトリエンナーレ以降かな、名古屋でも若い作家が作品収入で食べていけるんだっていう事例をもう知っているからっていうか、むしろ食べていかなきゃいけないんだっていうのは、村上隆以降ってことなんですけど。各地を転戦してっていうタイプの作家で、芸術祭やレジデンスなどの機会を転々として、アーティストとしての収入だけで食べていくっていうことを目指す人が増えたんです、実際」(50代女性)
「(現在40代前後の）アーティストたちのキャリアを見てると、卒業した後に3〜4年、作家をやりたいと就職しないでも週3ぐらいバイトしながら制作して定期的に発表して何とか30代前半ぐらいで形になっていく。で、30代ぐらいから美術館とかトリエンナーレとかギャラリーとか、いろんな発表の場、公募とか出して決まっていく。美術は10年ぐらい、芽が出るまでかかるんですけど、その10年をたぶんフォローしてるのが家族だったり。仕送りしてないまでも、何かどうにか社会に余裕があるというか、ちょっとバイトすれば食べてはいけた」(40代女性)
「まだ自分の作品だけで、いろんなお金を賄えるみたいなところには全然いけてなくて。でもそれを賄いながら制作するみたいなことを今度考えると、じゃ、何かの仕事に就かなきゃいけないのかみたいな発想になってくるんですけど。そうするとちょっとスペース使い過ぎちゃうというか、やっぱ制作をしたいみたいな、他のことやれる自信はあんまりないみたいな」(30代男性)

しかし若手の時代を過ぎても、アーティストフィー[8]や、作品の販売収入のみで生計を立てられる者は少数派である。また作品が美術界で高く評価されることと、作品の売り上げが高いことは必ずしも同じではなく、インスタレーションなど販売しずらい分野も増えている。

「アーティストだ、画家だ、デザイナーだ、演奏家だ、作曲家だっていう人は、割合はわかんないですけど、ほんとにそれで食ってる人はほんと少ない。でも、それをやりたいし、半分とか3分の1ぐらいそれでやってるっていうような人は、ぐわーっといるんですよ」(60代男性)
「有力画廊が付いていて、それなりのユニークな仕事をしていて、という売れる人。でも、そういう人でも結局は、なかなか作品だけで食っていけない。現代アートも絵とか彫刻でも作品として、不思議なものが多くなってきてますから、個人の人があんまり買わな

[8] 展覧会やアートプロジェクトでアーティストに支払われる出展料や報酬

いっていうか」（60代男性）
「分かりやすくて受けやすいやつは、それは売れるんだろうけど、ちょっと小難しかったりすると、みんなすごい評価してるけど、売れることにはつながってないから」（60代男性）

実際の生計を立てる方法としては、美術を教える仕事が大半を占める。アーティストとしての本業を生かした仕事で世間的な評価も高く、時間の自由も効くという点では、大学の常勤教員が一番にあげられるが、その他には小中高校の美術教師、高校の美術科や専門学校デザイン科等の講師、大学の非常勤教師、美大予備校の講師、習い事の美術講師などに従事している者も多い。

「一番ハッピーは作家でしょ。大学の常勤はいいけど、美大と総合大学と短大と、もう全然違うから。今はいろんなこと、高校訪問までやらなきゃいけないから向き不向きあるし、あと数が少ない。一番多いのは非常勤でしょうね。高校、中学、大学。あとは研究所の先生、あとデザイン事務所とか技術関係とか。美大だと割と時間も融通も効くから、制作はしやすいんじゃ。そこで、制作ちょっとできたりもするので」（60代男性）
「どうサバイブするかっていうと、この近辺に仕事があるからだよね。アート以外の仕事が多分あるから。あと塾。あるいは画塾だよね、結構あるから。そもそもこの地域って割と塾が多い。習いごと系なんだよ。現代美術やってる人間からすると、絵を教えて食べていけるっていう部分があんだよね」（50代男性）
「（小中高の）愛知はとくに、美術の新任の先生が非常に少ない。昔は学校の先生やりながら、アーティストって人もいたんだけど、専任が非常に少ない。華やかなアート文化振興の割にそれはないんじゃないかなっていうのがあって、それは首長部局と、教育委員会との温度差があるかもしれませんけど」（60代男性）

生計を立てるために教育の仕事に就く者のなかでは、時間がたつにつれ、セカンドキャリア的に教育の方により力を入れていくケースもみられる。

「アーティストだけで本当は皆さんやっていきたいんでしょうけど、大学も時間取られるので。ただ教育に関心がある人、次世代をなんとかしなきゃとか、ある歳になって『自分が頂いてきた恩恵をちゃんと次の世代に還元しなきゃ』とかいろんなモチベーションあるんでしょうけど、教育っていうことに広い意味で関心を持っていると、アーティストはむしろすごいいい教育者なので、大学に行っても、うまくフィットしていくと思います。一方で、仕事は増えるので、制作だけに専念したいけど、やっぱ固定収入が必要だ、家族もいるし、みたいなアーティストは、頑張って我慢して大学にいるっていうタイプと、大きく2つ分かれていくだろうなと」（40代女性）

「教育のほうへ行っちゃって、忙しいのか、興味がなくなるのかで、あまりやってないっていう方も多いのかもしれないです。その逆に『業績積め』みたいな、大学側からの強迫で、いやいやでも展覧会っていうものをやってる。大学によってはやっぱり、海外でやったら何ポイントとか国内だと何ポイントみたいなことを。そういう評価をされるんで、何とかしてやんなきゃ、みたいなのは聞きますね」(50代女性)
「名古屋にいると取りあえずバイトとかで収入は得られる。美術大学も多いから、非常勤もうまいこと入れれば固定収入になりますし。そのままずるずると美術関係かもしれないけどアルバイトで生きていくことができてしまったから、そこから脱出できないパターンっていうのが出てきますね。例えば河合塾で長く講師として世話になった人たちって、ちょっと失敗してるんです」(50代女性)

その他、アートのスキルを活かした仕事としてデザインやディスプレイなどの仕事、時間の自由が効くアルバイトとして、コールセンターのオペレーターや販売員、福祉施設スタッフなどがあげられた。また自身の制作や発表の場としてスタジオやギャラリーを運営しながら併設の飲食店で収益を得るという事例も複数みられた。

５）表現活動の場としての環境

オーディエンスという観点でみると、一定規模の人口があり、名古屋圏で多くの美術館やギャラリーが存在し、多彩な美術展やアートプロジェクトなどが行われてきた歴史から、現代美術にも一定の観衆やアートファン、コレクターが存在しているという基盤がある。

「日本全国の県別で切るとか、あるいは世界のいろんな都市で切った時、それをアートを見るってことのオーディエンスの知識とか経験量は、割と愛知県はあると思う。それはほっといたら退化しちゃうんだけど、やっぱりそういう市民の人たちがアートになじむっていうこと、これまでの名古屋ですごいやってくれてるからこうなるんだしっていう感じで、大事にしたい」(60 代男性)

アーティストは毎年、美術大学から輩出されていくが、美術の中でも領域ごとの交流、あるいは美術と演劇や音楽などの分野を超えた横断的なコミュニティがみられないことも語られた。

「名古屋は、ペインターはペインターで集まって、別のメディアのアーティストは別のメディアのアーティストで集まってっていうふうなところがものすごく強い。隣の例えば別素材のアーティストと絡みがないんですよね。そこの中の言語があって、その中の枠の中

しか動かないっていう構造がある。それぞれのコミュニティがあるんだと思うので、そのコミュニティ同士が、ネットワークがつながってない。それは組織的なコミュニティがもちろんあるんかもしれないし、個人的なコミュニティもそうだしみたいな。名古屋の縮図はそこだと思います」（40 代男性）
「学閥はそこまで感じたことはないんですけれど、展示はギャラリーがそういう志向なのかもしれないんですけど、若手の作家さん取り上げてるのはペインティングが多くなる。立体作家さんのアウトプットをするチャンスっていうのか、京都とかだったら、演劇の美術やったりできるのは、やっぱり立体の作家、彫刻家にとってはいい環境なのかな。名古屋は他の分野のとの交流っていうのが他地域に比べて少ないのかなっていうのは感じたことはあります」（40 代男性）
「美術の人たちは音楽を見に行かないし、音楽の人は美術見に行かないし。音楽やってる人が『ゴッホもピカソも見たし』って、そんなの普通の人でも見に行きます。音楽家だから、クラシックやってるから見に行ってるわけじゃないです。クラシックのコンサート行って、美術のアーティスト見ることないですよね」（70 代男性）

また、名古屋圏の中では、制作場所が確保でき、一定の発表の場があり、観衆やコレクターがいて、表現活動を完結することができるため、実力があっても全国や海外に活動の場を求めず名古屋圏のみの活動にとどまるアーティストが多いことも指摘された。

「40代、50代になっても、名古屋の作家って東京とか関西とか他の都市でやるっていう意識がない。ちょっと残念ですね、ある程度のレベルいってるんだけど。美術館にも微妙にしか取り上げられないし、東京中心のマスコミとかには引っかかってこない。海外でもいいし、他流試合じゃないけど、いろんな人と交わらないと作家って成長しないと思うんですよ。自分たちの友達の友達程度での輪だけでやってるっていうのはあまりにも狭い、見に来る人も知ってる人しかこないっていうのはちょっとと思う」（60代男性）
「もう少し世界を見る目を広く持ってもらったらいいなと思うんですけど。自分の制作が続くっていうのは作家としては一番大事なことであるのは理解するんですけど、それが愛知県の中だけで収束してていいのか。おそらくこの地域の、特に若手は無理やりでも外的要因で刺激を与えてあげないといけないのかなって思うぐらい、ほっとくと刺激なく暮らせて制作できてしまう。そういう意味での、いい意味での外からの刺激っていうものを無理やりにでもさらす機会みたいなものは、支援の在り方としてあるのかもしれないですね。」（40代女性）
「結構経歴が『愛知、愛知、愛知、愛知』みたいなアーティストが多い。レジデンスへ行ってみようとか、よその都市で発表しようっていう、がつがつしたというか意欲的な作家は、少ない印象が。居心地はいいんだと思います。自分のペースで仕事しながら制作して、発表して、で、続けられてる気がします。結婚したりとか子供ができたりとかのライ

フステージの変化によって、作家業自体がもう続けられなくなっちゃってる人も他の地域では結構いると思うんですけど、愛知は何となくいられるみたいなところが良さなのかもしれません」（40代女性）

また、キュレイターやマネジメントの方もネットワークが限定的であり、美術館の守備範囲が狭いという意見もあった。

「（狭い人間関係の中で仕事をまわしてしまうのは）名古屋の人はすぐそうなっちゃうんですよね。外から来た人もそうなっちゃう。もっともっと開かないと駄目だと思う。その名古屋っぽい悪いとこ広げると日本っぽさになるって感じがします。人選が友達つながり。全然そこじゃない部分にもどんどん門戸を広げていくべきで、絶えず人が入れ替わっていくような仕組みにするしかない」（40 代男性）
「美術の場っていうものがちょっと変わってきて、学芸も把握しにくいと思いますね。映像系とか工芸系とか、空間デザインとか、ファッション系とかそこら辺のジャンルの方でちょっと領域横断的な作家っていうのはフォローするのは難しいです。この表現が多様化してきてるのを意外とみんな気がついてなくて、取り上げられている地元の作家もかなりごく少ない。美術の中でも領域ごとに固まってて、（全体は）広いのに、美術館が扱っているのが狭いなって思う。デザインギャラリーもあんまりないし、名古屋ってデザイン都市とか言いながら」（60代男性）

６）名古屋に対する期待と課題

愛知県や名古屋市、あるいは自治体などの公的支援に関しては、助成金などの金銭的な支援の他に、発表の場や人的交流の場、専門人材による長期的・継続的なアーティストへの支援などを望む意見が多数あがった。

「次のステップに行く時に、海外の展示とかここが勝負だっていうのがやっぱりあったりするので、そういう時に金銭的な支援で助けてもらいたい」（30代女性）
「発表の機会か、制作費の援助か、制作場所。この3つくらいのパターンなのかなと思うんですけど」（30代男性）
「お金を渡す公募展があればいいわけではなくて、結局どういう人がセレクトするのかとかっていうのと、それに通ったことで、どういうフォローをされるのかみたいなのとかが結構重要。例えば、清須市はるひ美術館のはるひトリエンナーレは、多分アーティストとかの中でもすごく信頼度が高い。別のある公募展は審査員の人はすごく魅力的でいいんですけど、そこに自治体が関わってることでその意見がすごく反映されていて、あんまりアーティスト目線ではないなっていうのをすごく感じてしまって。公務員の方が関わってる

から、そのこうであるべきみたいなのにすごく縛られていて、その人たちが雇ったインストーラーに丸投げみたいな。その丸投げがあんまりいい印象にはならなかった」（30代男性）
「大学出てからの5年間とか10年間、大学としては非常に苦しんでいるところを、助成とかしていただけるんなら。何かやってる人たちが集う場所みたいなのを安価でつくるとか」（60代男性）
「クリエーターが集まるようなカフェがあって、アート系とか演劇系とか何でも、建築でも何でもいいと思うんですけど本も読めて、若手の作品とかがそのスペースで展示してあるとか、それだけで最強なんじゃないか。場があればトークイベントとかできて、それを続けていくと県外からとかも、名古屋行ったらそこ寄るみたいなとか。結局場が一番なんだな」（30代男性）
「何かの跡のスペースを、自由に使える倉庫スペースみたいなところがあれば。正直サポートも何もなくても、何か勝手に膨らんでいくんじゃないかなと思う。住めて、制作できて、発表もできてとかする場所があれば。アーティストがきっかけ作りをするというか、マネジメントとか考える人はまた別に集まってきたら一番理想」（50代男性）
「普段出会わない他の地域の学芸員とか評論家とかギャラリストとかと若い作家が、学生に限らず出会う場がどこかにあってもいいのかな。アトリエ訪問みたいなのは車がないと大変なので、そういうビジットを組んでもらったりするとすごいありがたかったりしますけど、なかなかそういうサポートはないですもんね。ちょっと制作がスタックしてきた中堅の層も含めて、何か外の世界とつながり続ける機会みたいなものを、公的機関がサポートしてあげるっていうのは大事なんじゃないかなと思います」（40代女性）
「ひとりの作家を、どれぐらい長く見て支えることができるかっていうと、やっぱり難しいところがあると思うんですね。システム自体なくなる可能性がかなり大きいし、行政は異動があって、専門職も代わっていく。一人の個人が蓄積したつながりとか知識とか情報とかが、引き継いでいかれない可能性が高い。一人頼りになると当然偏りも出てくるわけで。うまく継いでいきつつ、新しい血が入るっていうやり方ってできないのかなって。愛知県美は割とその地域の情報とか作品収集とかにも力を入れていて、若い学芸員が担当に入ってだいぶ感じは変わってきました」（50代女性）
「福岡市なんかはよくやってるなって、北九州とかやってると思う。福岡でコンテンポラリーアートフェアをやった時は、市長が初日に激励に来てましたし」（60代男性）